
ジンジャーエール

和泉紀伊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジンジャーエール

【Nコード】

N2958V

【作者名】

和泉紀伊

【あらすじ】

自家製のジンジャーエールが斎藤智秋と二ノ宮恭子を繋いでいた智秋が自分の家をホテルとして解放していた頃の『ハーミットクラブ』と、結婚した後の智秋の生活を描いた『ジンジャーエール』の二部構成

卒業生の出したお題をクジにして在校生が引き、それに沿った小説を書く企画がサークル内でありました

←引いたお題←

「愛してる。愛してる。世界で一番愛してる。山より海より愛してる。宇宙の百倍愛してる。君の彼女より愛してる。自己愛超えて愛してる。愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛したその先に、行き着く憎さの数万乗数億乗愛してる」

生かせてません…

ハーミットクラブ？

よく冷えたジンジャーエールが喉をおりていく。くせのある辛味とさわやかな甘さが口に残った。けれどそれが不快ではない。上下する斎藤智秋の喉元を二ノ宮は嬉しそうに眺めている。

「本当においしそうに飲むよね」

「実際、二ノ宮のジンジャーエールはおいしいよ」

二ノ宮の隣は居心地が良い。智秋にとって彼女を独占できる再履の授業は特別な時間だ。好意を寄せているわけではないが、二ノ宮がいて、そして彼女の自家製の飲み物がある、このひとときが大切に思える。

「そういえば、ジンジャーエールの《エール》ってなんだ？」

「声援のエール、かな」

まさか、と智秋は苦笑する。炭酸の気泡がはじけて消えていくのを見て、少し寂しさが込み上げて来た。

吹き抜けを見上げる。きつと空っぽな貝殻の底にたたずんでいるのは、こういう気分なのだろう。

天窓から入る光が目にも痛い。両親は弟の病気のことと憤り、たびたび大声で言い争っていた。母親は新興宗教にはまり、しまいには互いにパートナーを捨てたつもりになって家を出て行って、もう二年が経つ。彼らの私物を残らず売り払い、最後に弟が愛用していたクレヨンも躊躇いなくゴミ袋に投げ込んだ。鮎川が泊めてほしいと言って来た。それから少しずつ彼の紹介で同年代の人々が訪ねて来ては泊まって行くようになり、彼らの世話に追われたが、苦ではなかった。宿泊者から《ホテル・ハーミットクラブ》と呼ばれていることを後に聞かされた。

ドアを開けると、見覚えのある女性が立っていた。思い出せない

けれど。そういえば週末に二泊三日で同じ大学の女性が泊まりに来ると鮎川に聞いていた。

「やどかりホテルってここでいいの？」

智秋の後ろを覗き込んだ彼女が訊ねる「民家よね」

「誰かが勝手にそう名付けただけだ。お好みとあらばロイヤルホテル・ヤドカリと呼んでくれても構わない」

彼女は二ノ宮恭子と名乗った。簡素な荷物を預かり、スリッパに履き替えさせてリビングに案内する。脚を揃えてソファに座ると彼女は聞いた。

「ところで総支配人さん、今夜のディナーは？」

「今日はカレーライスになるんじゃないかな」

上の階から宿泊客の「今日もの 間違いだろうが」という切実な苦情が降り注ぎ、二人はおかしくて笑う。

夜は雨にみまわれた。チャイムが鳴り、智秋は火を止めて玄関に向かう。口元にはくろのある青年が黒い傘を差して立っていた。「恭子が来ているだろう」

彼は智秋を睨み付ける。薄気味悪い奴だと思いつつ二階に向けて呼びかけた。二ノ宮は青年の顔を見るなり眉をひそめる。

話を聞いていると青年は二ノ宮の元彼氏で、復縁を迫っているらしいことがわかる。品種改良で痴話喧嘩を食べる犬が出来たら、さぞ喜ばれることだろう。智秋は三和土で煙草を吹かしながら傍観する。

言い争いが激しくなるにつれて、智秋は内に込み上げてくる憤りを感じた。そして青年が拳を振り上げた時、気付けば智秋は飛び出して彼の喉元を掴んでいた。水たまりに落ちた煙草の火が音を立てて消える。

「うるさい」

冷たい雨に打たれる。手を離すと青年は波紋の立つ地面に倒れた。智秋は二ノ宮に肩を抱かれて家に入る。雨の中に呆然と座り込む青年が取り残されていた。

いつだって吹き抜けを見上げて考えるのは幸せとは何だろうということだった。《幸》という字は昔、図鑑で見たきれいな形の貝殻に似ているというのに、自分はちっとも幸せだとは思えない。愛情というものが理解出来ないのに、あの図鑑はもう捨ててしまった。ソファーに横たわり、口を開けば溢れるように泣き言がこぼれる。母親が自分を置いて、弟を連れて出て行ったことや友達の多くが思い出の中にしかないこと。智秋はもう頭では話していなかった。それでも二ノ宮は傍らで黙って耳を傾ける。

「人の出入りが激しい、ホテルそのものじゃねえか」
彼はそう自嘲した。二ノ宮が耳にかかった髪をかきあげる。白い貝殻のついたイヤリングが揺れていた。

二ノ宮は水筒から浅黄色の液体をグラスに注いで差し出す。細やかな泡が底の方から立っていた。上半身を起こし、それを含むと少し舌が痺れた。ジンジャーエールだった。

「自家製の」

「市販のより少し辛いな」

「私もいつかあなたから離れていってしまうけれど、一緒にいる間はあなたにこれを分けてあげられる。それが例え、短い間だとしても何かを共有できるって良いことだと思わない？」

それに私は何かを与えることでしか人と繋がれないの、と二ノ宮は水筒の蓋にジンジャーエールを入れて飲み干した。

「友達が一人増えて良かったね斎藤君」

週明けの講義に出ると、肩口で髪を切りそろえた二ノ宮に話しかけられた。どうりで見覚えがある筈だと得心がいく。

「その髪型もなかなか似合ってるよ」

「ありがとう。これ、図書館の横で切ってもらったんだ」

「図書館の脇に美容院なんてあったか？」

「駐車場にレジャーシートが敷いてあって、椅子がぽつんと置かれていたの。即席の床屋さん。上手だし、クールで感じの良い人だったよ」

「変わったことをする人がいるもんだ。あんたも含めてだけだな」
「二つ並んだグラスにジンジャーエールがそれぞれ泡立っている。」

ハーミットクラブ？

女友達に囲まれている二ノ宮に話しかけることは躊躇われた。そういう時間が少しずつ多くなっていく。大学三年生になった時、彼女との接点がどれ程削がれているか考えると少し、怖くなる。就職活動が本格的になれば、彼女はそのまま自分の人生から泡のようにいなくなってしまうような気がした。

喫煙室で鮎川と煙草を吸う。こもり切った煙が如何にも健康を害しそうだ。自分が吐いたわけでもない紫煙を共有することも果たして良いことなのか疑問だが、煙草をやめようとは思えなかった。

鮎川がおもむろに取り出した紙の切れ端を受け取り、文面を読んで智秋はむせる。

『愛してる。愛してる。世界で一番愛してる。山より海より愛してる。宇宙の百倍愛してる。君の彼女より愛してる。自己愛超えて愛してる。愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛したその先に、行き着く憎さの数万乗数億乗愛してる』

紙片を返して問うと鮎川は、文芸部の卒業生が出すお題で小説を書く企画らしいと答えた。

「俺の友達がこれで書くらしいけど、『愛なんて理解出来ねえよ』って頭抱えてた。つかこれ重た過ぎるだろ。言われたら、俺ならドン引くね」

違いねえと智秋は苦笑した。鮎川が続ける。「だけどさ」

「こんな風に言ってくれる女の子が目の前に現れた時、お前は一体どういう態度を取るんだろうな」

鮎川の言葉が胸を衝く。じわじわと煙草の火が指に向かってのぼって来ていた。

「お前はいつか二ノ宮でもなく、それどころか俺さえ知らない誰かで妥協しちまう。そんな気がするんだ。変に女慣れしてるから余計に心配だ」

今のままじゃ、お前は本当に欲しいものに限って掴み損なうぜ。そう言つて鮎川は煙草を灰皿に押し当てて消す。か細い煙が立ち上るが、やがて消えた。

「わかつてる」

「わかつてねえよ。お前がわかつてるのはせいぜい煙草の味と単位を取りやすい科目ぐらいだ」

床に落ちた煙草の燃えカスは惨めなモノクロの芋虫に見えた。智秋は今の関係で満足している。進展を望んでいるわけではなく、ただこのぬるま湯に浸っているような日常がずっと続けば良いと思っていた。

大学を卒業するにあたり、家を引き払うことを告げると住人たちはいやにあっさりと了承した。数日で元通り、空っぽになった。けれど以前とは違い、広くなった間取りはどこか清々しく感じられる。少しだけ強くなれたのかも知れないし、もしかしたら寂しさに折り合いがつけられるようになっただけかもわからない。

本や家具を売ると智秋の荷物は鞆二つに収まってしまった。手伝いに来た二ノ宮がちっぽけな手荷物だと笑う。

ソファアーに肩を並べて座った。二ノ宮は膝に水筒を抱えている。

沈黙を先に破つたのは彼女だった。

「私は誰かの人生の登場人物でありたい」

智秋はジンジャーエールを一口飲んでから、どういふことか尋ねた。

「誰かが岐路に立つた時、思い返す記憶の一部に私がいて少しでも参考にしてもらえたら嬉しいじゃない」

そんなこと考えたこともなくて、智秋は改めて誰か自分を思い出してくれる人間はいるのだろうかと思案した。きつとこない。わずかに残った分をぐつと飲み干す。透きとおったグラスに頼りない両手が添えられているのが目に映る。

「つまり付箋紙の貼られたページになりたいんだ」

「そう。誰かにいつでも開いてもらえる思い出になりたい」

新たに注がれたグラスを二ノ宮から受け取る。あと何回、彼女と一緒にジンジャーエールを飲むことができるだろう。もしかしたらこれが最後なのではないか。少し切なくなった。

二ノ宮がしみじみと言う。

「ロイヤルホテル・ヤドカリは廃業か」

「ヤドカリは成長すると、古い殻を捨てて引越すんですよ」

栗色の髪をかきあげる二ノ宮の耳に貝殻のイヤリングが小刻みに揺れている。触れてみたいと伸ばした手を彼女が気付く前に引くめた。

帰り際に呼び止められる。世界の終わりを思わせる、沈みかけの真つ赤な夕日を背負う二ノ宮の表情は見えない。

彼女は手を振りながら言った。

「頑張れって言葉は嫌い。だって誰かに頑張れと言われる時には、きつとその人はもう頑張ってると思う。だから私はこう言うの」

細い体のどこから出したのかわからないけれど、二ノ宮は声を張った。

「ずっと斉藤君のこと応援してるから」

智秋は叫びだしそうになるのをぐっと堪えて、大きく手を振り返した。彼女の耳に届かないような小さい声で別れの言葉を織り交ぜて。もうすぐ陽がくれるんだな。こみ上げてきた寂しさを拭い去れない。

太陽は西に沈み、まだ肌寒い春の夜が東から訪れる。

ジンジャーエール？

微細な泡が、ふちの間際までのぼってくる。こぼれるかと思いきや持ちこたえた。二人のグラスにジンジャーエールを注ぎ終え、ペットボトルを机の端に置く。左手の薬指に躊躇いがちに光る指輪。

「ねえ斉藤君」

「何ですか斉藤さん」

気恥ずかしそうにして彼女は言い直す。

「智秋君」

「何かな秋桜子さん」

チャイムが鳴る。秋桜子が玄関へ赴く。

市販のジンジャーエールに口を付けて、智秋は少し物足りなさを感じた。自家製の味はもう思い出せない。

庭に陽光を受けた鮮やかな金木犀が、匂いを振りまきながら重たく揺れている。つい名字で呼んでしまう秋桜子の初々しさを思い出して微笑む。

『愛してる。愛してる。世界で一番愛してる。山より海より愛してる。宇宙の百倍愛してる。君の彼女より愛してる。自己愛超えて愛してる。愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛したその先に、行き着く憎さの数万乗数億乗愛してる』

時々、怖くなる。秋桜子との結婚で満足しているのか。本当に彼女を愛しているのだろうか。そう考えると負い目を感じた。

秋桜子がなかなか戻らないので様子を見に行くと玄関で初老の女性の話に耳を傾けていた。女性は手に小冊子を抱えながら何やら説明している。宗教の勧誘だった。

しきりに勧められて、秋桜子もはつきりと断ることが出来ずにいた。埒が明かないので智秋は三和土に降り、二人の間に割って入る。「旦那様ですか。今奥様にもご紹介したのですが、一度だけでも私たちのセミナーにいらっしやいませんか」

「一度だけは二度目がある常套句ですよ。それと生前の親父に宗教家を見たら崇められてるのは金と思えって散々戒められたんでね」
「宗教だなんて、そんないかがわしいものと思わないで下さい。私たちは市民にとって有益で善良な活動を推し進めているんです」

女性は譲らない。だんだん嫌けが差して来た。

「どっちみち俺達には関係なさそうだ。あいにく、自己中心的でね、ジンジャーエールの炭酸が抜けないかの方がよっぽど大事なんだ」
「なんという言い草ですか！」

叱責する女性は顔を紅潮させていく。次第に話題が世界規模になり、うんざりした。宗教と聞くと自分を捨てて出て行った母親を思い出してしまう。神なんてくそ食らえだ。心中で悪態をつく。

彼女は執拗に主張を続けた。やかましくて仕方ない。女性の喉元に腕を伸ばすが、途中で自制する。

「うるさい」

女性が帰り、秋桜子の手には多数のビラや小冊子が残された。智秋は受け取り、一瞥してゴミ箱に放り込んでいく。顔写真は載っていないが、原田慎一郎という若手政治家をゲストに迎えたシンポジウムの告知も挟まれていた。法律のことはよくわからないが、違法なのでは？ とため息を吐く。

「きちんと断れなくて、ごめんなさい」

「次までの課題です。ところでさっき話そうとしてたのは何だったんだ？」

目線を泳がせ、秋桜子はばつが悪そうに言う。

「近所で変な勧誘が流行ってるから気を付けてって」

「手間が省けてちょうど良かった。神の加護かもな」

その時にやっと、風が運んで来る金木犀の香りに智秋は気付くことが出来た。

映画を秋桜子と二人で観に行くことになった。上映を待ちながら

隣のシートでは秋桜子がアガサ・クリスティーの『そして誰もいなくなった』の文庫を読んでいる。きりが良いところで、彼女はしおりを挿む。

「名前が覚えられないから国外の小説は苦手だな」

「すぐよくわかる。これなんか人もいっぱい出るし、肩書きがわからなくなっちゃって、登場人物の紹介を何度も見返しながら読めるの」

ブザーが会場に鳴り響き、早送りで陽が落ちていくように、暗くなっていく。秋桜子が耳元でささやく。撮影をこの近くでやったんだって。映画が始まる。

中盤に差し掛かったところで智秋は画面に釘付けになった。喫茶店のシーン、画面の端のテーブルで男性と向かい合って食事をする、二ノ宮の姿がそこに映し出されていた。彼女が笑むと貝殻のイヤリングはわずかに揺れる。心が波立つ。二ノ宮を笑わせているのが自分ではないことが悔やまれたし、激しく嫉妬した。これが失意かと自覚してうなだれる。

彼女はまだ、応援してくれているのだろうか。

スタッフロールが流れ、映画が終わった。夜が明けるように劇場に照明が点る。

「どうかしたの」

秋桜子が心配そうに智秋の顔を覗き込む。大丈夫、何でもないと首を振った。

「ただ、少し切なくなっただけだから」

「今の映画、コメディだよ？」

足繁く映画館に足を運んだ。四回は観たかもしれない。内容はよく覚えていなかった。いずれも自分自身を傷付けるような作業の繰り返しだった。幸福な時間が瞬く間に消えていくことくらい、わかっていた筈なのに諦めきれないでいた。

やるせなさと言いい知れぬ空白を抱えて帰路につく。足取りが重い。コンビニの角を曲がると空き地が広がっている。地面は丁寧慣らされていたにも関わらず、レジャーシートが堂々と敷かれていた。気品のある椅子が一つ置いてあり、その脚下に『高遠理髪店』という小さな看板が立てかけられている。

即席の床屋さん。二ノ宮の言葉を思い出す。その時、後ろから声をかけられ、驚いて振り返るとコンビニのビニール袋を抱えた端正な容姿の青年が立っていた。

ジンジャーエール？

「おしゃべりな床屋はお嫌いですか？」

「そんなことはない。人と話すのは好きなんだ」

腰に提げたホルダーから高遠は鋭利なハサミを取り出す。薄い布地に包まれた智秋の膝に、まとまった黒髪がはらりと落ちてきた。テンポよく彼は髪を切っていく。まるでパフォーマンスのようだった。

「いつもこんなことをしてるんだな」

「ご存知でしたか」

二ノ宮の話をすると高遠は、ああと呟き、貝殻のイヤリングをした女性ですねと言い当ててみせた。

「覚えているのか」

「あまり動かないで。勿論。今までに髪にハサミを入れた方のことは覚えています」

利用者が少ないこともありますけど、と高遠は苦笑する。その低く、静かな話し方と柔らかい物腰に智秋は安心感を覚えた。風はない。穏やかな午後の陽射しを受けながら、軽快なリズムで少しずつ頭が軽くなる。

「床屋は人間を愛していないと出来ない仕事です。何故なら人は身体を離れたものを不浄として忌み嫌う。他人のならば、尚更ね。けれど私は決して髪を穢らわしいとは思いません。商売だし、それ以上には人とながる方法をこれしか知らないんですよ。お客さんとコミュニケーションをとりながら、何かを切って、そして人と結びつく、そんな仕事は床屋をおいて他にないと私は思います。私にとってハサミは他者と接する為のツールで、髪はそのきっかけなんです」

「愛なんて理解出来ねえよ」

二人の対話は続き、智秋は自然と心の中の空白の話をしていった。

高遠もそのときばかりは黙って聞き入る。

智秋が口をつぐむ。高遠が話し始めた。

「その空白はそこに大切なものがあつた痕ですよ。あなたは気付かなかつただけで、とくに人を愛せていたのではないでしょうか」

そよ風が、道端の雑草を揺らす。

「自己愛を超えた先に他者を愛する余裕が生まれるのは当然です。何かを分け与えるようなものだから。今は混乱しているだけで、きつと波が静まれば、もう一度はあなたは人を愛せますよ。失わないうちに、次はもっと深く」

ハサミが止まり、静寂があたりを包み込む。新鮮な空気の流れを肌で感じた。耳を済ませば、雲の足音さえ聞き取れそうだった。智秋は二ノ宮と最後に話したときの家の清々しさを思い出す。閉塞感から解放された気分だった。

「良いカウンセラーはうなずくだけで患者を癒せると聞きます。その点、根無し草の理髪師が出過ぎた真似をしたことをお詫びします」
舞台を降りる前の役者のように高遠はうやうやしく頭を下げる。
立ち振る舞いを見ていると実際そうだったのではないかと智秋は思った。

「詫びだなんて。こちらこそ、ありがとう。なんだか楽になった。あんた才能あるよ」

「お褒めに預かり光栄ですが、私はしがない床屋ですから。そうだと近くで映画の撮影があつたときにエキストラの女性から聞いた言葉の請け売りなんです」

一拍おいてから高遠は言う。「エールはまだ、続してる」。そのたった一言で心がわくようだった。そして同時に不覚にも泣きそうになる。

「二ノ宮にはクールだつて聞いてたんだけどな」

相手によって対応を変えているんです、と唇に人差し指を添えて高遠は告げた。他言無用と言いたいらしい。

「こっちが地ですよ」

「どうせ誰にでもそう言ってるんだろ」
赤いトンぼが羽音を残して飛び去った。

ジンジャーエール？

秋桜子がない。登場人物の名前と職業を無地のしおりに書き写し、智秋は文庫に挟んだ。それから料理本を見つけて付箋の貼られたページを開くとジンジャーチャイのところに付箋を移す。

ジンジャーエールをグラスに注いで一口飲む。少し生温い。ふと人魚のシルエットが印刷された紙のコースターが目につき、おもむろに裏返す。秋桜子からのメモが書かれていた。

『人数合わせで、原田という人のシンポジウムに参加します。五時には帰ります』

「六時じゃん今」

底から泡がのぼって来ては弾けて消えた。せわしなく、ずっと繰り返される一連の営み。自分は変われるのだろうか。智秋は目を閉じ、問いかける。二ノ宮のジンジャーエールの味がよみがえった。

ペットボトルと飲みかけのグラスを冷蔵庫に入れる。炭酸が抜けてしまう前には帰って来たい。煙草に火を灯す。一息吐くと面倒そうに短くなった髪を掻いた。「王子様ってのは柄じゃねえけど」
「人魚姫が泡に消えてしまう前に、迎えに行つてやるか」

下げられた紙に『原田慎一郎』の文字を見つけ、受付嬢の制止も聞かず、強引に扉を開けた。会場中の視線が智秋に集まる。それでも躊躇うことなく前に躍り出ると突然のことにざわめいた。最前列に出て、壇上でスポットライトを浴びている男性の一人と目が合う。その口元には見覚えのあるほくろがあった。よりにもよってお前かよ。顔をしかめて、思わず声にだしてしまう。世も末だと智秋は肩をすくめる。

安っぽいパイプ椅子に座り、啞然とするゲストを後目に智秋は舞台に上がる。暗幕の際にいた司会者からマイクを奪って呼びかけた。

「秋桜子さん、いる？」

中段の席で女性が慌てて立ち上がるのを見て智秋はシニカルに笑って言った。

「帰ろうか」

満月が帰り道を照らしている。智秋は一步先を歩いていた。路地を抜ける秋風に紫煙がたなびく。煙草の火に誘導されるように秋桜子は付いてきた。

「怒ってる？」

「怒ってませんよ」

「怒ってるでしょ」

「怒るわけがありません」

「やっぱり怒ってる。だって斎藤君が敬語を使うのは決まってお腹に一物ある時だもの」

「俺のことをよくご存知で。さすがは斎藤さん」

絶え間なく聞こえる鈴虫の鳴き声。この野生の個体が十月初旬にはほとんど全滅してしまうのだというのだから切ない。

歩幅を広げて秋桜子が智秋に追いつく。風向きを見て、彼は煙草を携帯灰皿へと入れる。紫煙は誰かと共有するものではないのだ。しばらく無言で歩き続ける。

「最初、髪が短くなってたからわからなかったよ」

「散髪に行つて伸びて帰つて来たらびつくりだ」

似合ってるよと彼女は爪先を見ながら言い、全部見透かしているかのように続けた。

「だけど、いつか整理が出来たらで良いから何があったのか私にきちんと話して欲しい」

「ああ、約束するよ」

東からのぼった太陽に追いついて目が覚める。涼しい朝だ。隣のシーツはもう冷えていた。目を擦りながらリビングに降りていく。ベーコンと卵がフライパンで焼ける、香ばしい匂いと油のはねる音が徐々にはっきりしてくる。

テーブルの上に並んだ二つのマグカップが、湯気を立てながら智秋を待ちわびていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2958v/>

ジンジャーエール

2011年8月5日03時29分発行